この星に棲む善良な種族にて雨の鉄路を二足歩行す　谷岡亜紀

深夜、終電の行ってしまった後の線路を歩いている自画像だろう。現在は、終電後でも線路を歩いてはいけないのかもしれない。が、昔は飲んで終電に遅れた人たちはよく線路をあるいたものだった。上句のユーモアの味つけで、現実を抽象化するのに成功している。

充電を終えたる小鳥四五百の往きて電線のどやかに冷ゆ　片山佳代子

電線にずらりととまっていた小鳥たちが去ったのは、充電を終えたからだ、という見立ての意外性に注目。毎日かならず電線にとまっている小鳥たちがいる。もしかしたら本当に充電しているのかもしれない、そう思えてくるような一首。

はだか木の枝から枝へ移りゆく跳ぶようにリス秋深まれり　尾上宏

一連のリスの歌の中の一首。三句で切れて、四句でまた切れる。一種の倒置法を採用したものだが、独特のリズムが楽しい。第四句の「跳ぶようにリス」が独立しているので、その分イメージの輪郭が明快になっている。

つんと甘き月桃餅（ムーチー）食めり夏服の少女にまぎれ午後の廂に　清水あかね

修学旅行の引率で沖縄方面に旅した一連中の作。「夏服の少女」は同行した生徒たちらしい。一首に登場する名詞、「月桃餅（ムーチー）」「夏服」「午後の廂」が、それぞれはっきりしたイメージを主張しているのが特色。

短歌の現在

No.443　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

震災の跡まだとどむる松島の小島に残るミヤコハマギク　坂本朝子

ミヤコハマギクは小さな白い花。東日本大震災で荒れてしまった松島に見つけ、けなげにも生き残っていたんだと感じた作者。一首を、その「けなげ」さへの感慨と読んでいいだろう。

横切りし一閃の光翡翠の抜け殻のやうな水輪が騒ぐ　秋山智恵子

翡翠が水面にふれて、波紋が生じたのである。「翡翠の抜け殻のやうな波紋」が独特。自在な比喩を楽しんでいる感じが楽しい。

一文字（いちもんじ）、管物（くだんかん）、厚物、厚走り　背筋のばして菊並び立つ　鈴木陽美

挙げられている四つの名詞は、展示会での菊の名称らしい。菊にとっては晴れ舞台である。よそ行きの顔で背筋を伸ばしているのだ。

十一月「東京歌会」で、横浜の三渓園に吟行した時の作。折から菊の展示会が開かれていた。「一文字」以下の菊の名前はメモしておいたのか。写真を撮っておいたのか。吟行馴れしている俳句の人たちとちがって、短歌は一般的に取材が下手だ。ここはうまく取材している。

フロントにひつじ雲浮く小春日に風がまあるく吹く秋の午後　岩﨑敦子

晩秋の午後の、平和でのんびりとした日ざしと空気。やわらかい表現に注目した。俳句では季重なりになるところを、「小春日」を日射しのイメージで使って、破綻